

クロツカスの芽

小松 理英子 北海道

十一月二十九日に降る雨が今年さいごの雨になるといふ
十二月一日に降るこの雪が根雪になりてほんたうの冬
明日から雪にうもれるとも知らずここにもそこにもクロツカスの芽
夕刊のない地に住みて夕刊の連載小説を朝刊で読む
雪上のうさぎのあしあと目で追へば雪にうもれた人參にゆく

格差なし

兼平 佳津子 青森

雨あがり東は晴れて西空に岩木嶺跨ぐ大き虹立つ
ゴッホならクリムトならばどう描く風なくも降る銀杏の金を
「百貨店」と呼ばれ親しむなんでも屋コンビニとなり四年で廃業
山に雪里にも雪でも言はぬ遠まなざしのこけし取り出す
人間の生にも死にも格差なし 思へどもある絶対にある

はじめから

渡辺 南央子 茨城

万華鏡のやうなもみぢの山峡の蕎麦屋に狐、狸、猪じし在り
猟友会の手柄話をたたへつつわれはこつそり尻尾隠しぬ
インディアンサマーの朝日とどく丘犬が老いびと曳きつつ歩く
はじめからもう老女だった気がするの鏡のなかのわたしが言へり
スカートをまだはくのかと問はれつつレンジフードを拭く昼下がりに

夫婦別姓

春日夏実*埼玉

結婚をすると息子の連れ来たるはわたしと同じ名の「夏実さん」
「トシキさんは料理が上手」顔合わせの席で息子がまず褒められぬ
ことさらに理由なけれど四十年前われも願いき「夫婦別姓」
子の妻がわたしと同姓同名となることもうしわけなくうれし
職場では旧姓とおす子の妻よわが娘の名刺も旧姓しるす

夕暮れ

片岡 絢 神奈川

血圧のはなしを朝も夜もする 職を失くしてしまつた母は
ユニクロの店舗の白い外壁の枯れ木の影がくきやかな朝
とても良い上司だけれど居ない日はやつぱりどこか風吹きぬける
雨上がりそのうへ枯れ葉降りしきる夕暮れ出歩かない理由ない
冷房は減多につけず暖房は惜しまずつける父は痩せ型

白色絵本

草野 正 信*新潟

全ページ白色絵本の魚沼はページめくれば雪がこぼれる
峠道行きたる朝は紅葉を見帰りは白き山野を仰ぐ
リーダーの指図を待たず作業をし早く氷雨を逃れんとする
まとまりのなきかみえてある老いら調子を合わせて作業は進む
ようやくに歩きつきたる病院で診察までを杭のごといる

金色まとふ

横山裕子 富山

秋の野に隈なく落暉のひかり満ちわが身もろとも金色こんじきまとふ
鉢植ゑの金の成る木の葉の上にカマキリひそと夕光を浴む
信州産やや甘口の白ワイン老いにとまどふ身をめぐりゆく
人間とふ複雑にしてやつかいなものを生き来ぬ八十年余
人生に必然的なシナリオが存在すること老いて悟りぬ

爪

三浦陽子 長野

マニキュアのちひさき刷毛を爪におく さびしき爪ぞ冬の夜の爪
あぶなげな色とにほひをとちこめてこの世でいちばんきれいな小瓶
マニキュアの小瓶の正しい捨て方を検索したり爪ひからせて
梅剪らぬ馬鹿なるわれが思ひたち太枝きりぬきりて悔やめる
梅の太枝かどえひとつ切りたり眺むればさびしい梅になつてしまへり

不在

吉田美奈子 愛知

足裏に当たる丸みのやさしくて苑に踏みたるこれはどんぐり
ていねいに団子を丸めゆくやうに破調の歌のいびつを均す
草引くと嵌めし軍手の目の粗さ日常にいまだ戦争ひそむ
生垣に真紅のスカートかかりゐて夜の標的のごとくはためく
蜘蛛をらぬ網に夕陽差しきらきらす不在といふはいづれ寂しき

拳を握る

やぎ あきら 香川

「のどぬゝる」「熱さまシート」それぞれに直球勝負心くすぐる
ブラボーと叫びてゐしがクロアチアに負けて呆然午前の三時
赤と青 色分けされて速報にやきもきさせる中間選挙
ウクライナ停電に雨 何も出来ぬこのもどかしさ拳を握る
トイレ無しの生活する人五億人「世界トイレの日」に思ふこと

かちやし

今泉 洋子 佐賀

いつの日かマスク外せる日もあらむ口許に塗るリンクルシヨット
ころろまで新しくする着衣始そはじめ気合ひをいれて湯文字をつける
祖母おははが「かちやし」と呼びし藪椿咲けば思ほゆ産土の庭
子供らのはしやぐ声に目覚むれば初雪積る極月の朝
射目人いめひとの伏見稲荷に白石産いちご入りの大福を買ふ

冬の陽

海老原 光子 宮崎

コロナ禍の入院なれば獄中の父とぞ思ふ 空がまぶしい
吸ふ息の間遠くなりてちちのみの父はこの世を離れゆくらし
刻々と冷えゆく父の額よりしんと死は降りてゆくなり
北向きに休らふ父の足許へ遠慮がちに掛かるやはき冬の陽
そこここの余白にメモの残されて一首にならざりし父の言の葉